

## 【論文】

# 滋賀県の道路隧道と村田鶴 ー戦前の技術系官吏の経歴調査ー

Old Road Tunnels at Shiga Prefecture and MURATA Kaku

-Investigation of the Technical Government Official's Carrier at Prewar Days-

永富 謙\*

要旨：「滋賀県の近代化遺産調査報告書」により、同県には大正半ばから昭和初期にかけて意匠性に優れた道路隧道が数多く作られたこと、およびその大半を村田鶴という土木技師が設計したことが明らかになっている。これら隧道の特徴を説き、設計者である村田鶴の経歴を調査した結果を報告する。

キーワード：道路隧道、近代土木遺産、戦前技術系官吏(判任官)、技手(工手)

## I. 道路隧道の位置付けと滋賀県の隧道の特異性

土木史・産業史分野における道路隧道(戦前竣工の道路用トンネル)の研究は鉄道トンネルほど活発ではなく、また鉄道トンネルの派生物と見られがち傾向にある。しかし道路隧道ならではの特徴や発展を見せたものがあり、調べていくと大変興味深い。例えば道路隧道の坑門工は意匠性に富むものが多く、後年になるほど洗練され、バリエーションも増えていく。技術が成熟するにつれ機能重視・画一的になっていった鉄道トンネルとは好対照をなしている。

そうしたなかで、滋賀県には全国的にも例を見ない独創的な意匠のものも多く、しかもその多くは村田鶴という技師(技手)が設計したとされる<sup>1) 2)</sup>。一人の人物が継続的に、しかも意匠性に富む道路隧道を設計した例は知られておらず、一技術系官吏(特に下級官吏である判任官)の系譜という観点から見ても興味深い事例である。

本稿では村田が関わったとされる(可能性のある)道路隧道を紹介し、また彼の経歴調査の結果を報告する。

## II. 村田鶴が設計したとされる／可能性のある道路隧道

### 1. 横山隧道、佐和山隧道(1923(大正12)年／1924(大正13)年竣工)

横山隧道は県道大野木志賀谷長浜線、米原市(旧坂田郡東黒田村)と長浜市(旧西黒田村)の境に作られた隧道。笠石・帯石・付け柱をもついわゆる冠木門タイプの構造で、当時としてはスタンダードな意匠であるが、4本の付け柱と笠石帯石により構成されるプロポーシオンが非凡である。坑門工上の帯水を吐かすための排水樋も、坑門工意匠の一部ではないか

\* NAGATOMI Ken

(受付2009年9月30日)

と思えるほど統一感がある。

築後86年を経た今でもほとんど損傷がなく、ほぼ無改修のまま使われている点も評価が高い。組積造構造の隧道では坑道と坑門工の接続部分にクラックが入ることがある種の宿命になっているが、本隧道にはそれもなく、施工技術の高さ・設計の正しさを示している。

佐和山隧道は横山隧道と同時期に彦根市に作られたもので、意匠は横山隧道とほぼ同じ。戦後の国道改修に伴い片側坑口が塞がれ廃道となっている。

どちらも当時の滋賀県知事・堀田義次郎が寄せた四字扁額が掲げられている。横山隧道は近代土木遺産Bランク、佐和山はCランク<sup>3)</sup>に指定されている。

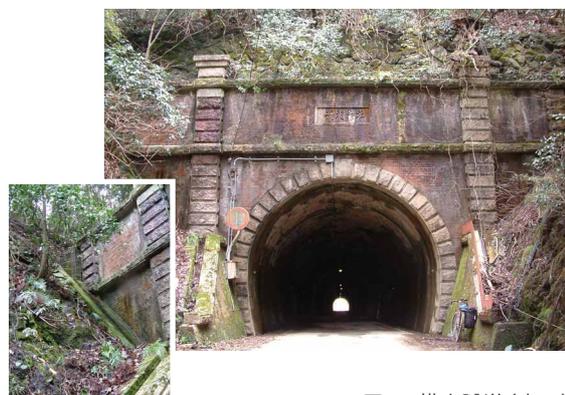


図1. 横山隧道(東口)

### 2. 観音坂隧道(1933(昭和8)年)

県道間田長浜線、米原市(旧坂田郡山東町)・長浜市(旧長浜町)境に現存。坑口面を前面に凸出させ、なおかつ木造建築における下見板張りに似た壁面装飾をコンクリートで再現している。坑口面を立体的に作るの簡単な工作ながら他に例を見ず、村田の独創といってよい。簡単な施工でできる両者を組み合わせ、さらに笠石下にデンティルを付けることでヨーロッパの古建築を見るような印象的な坑門工となっている。近代土木遺産Bランク<sup>3)</sup>である。



図2. 観音坂隧道(西口)

### 3. 湖北隧道(1934(昭和9)年)

伊香郡西浅井町，琵琶湖北岸の周遊道路(県施工)に作られたコンクリート製隧道。設計者は不明であるが，意匠への拘りや竣工時期，道路種別などから見て村田が関与している可能性が高い。構造は観音坂隧道に見られた凸型坑門工をさらに大胆にしたもので，さらに坑口周辺，その両翼，上端と奥行きが多段に変化する。両翼のみかけの高さを低くし，威圧感を軽減すると同時に，坑口部の張り出しをより印象づける効果を狙ったものと思われる。最前面となる坑口部の縁には大きなアールが取られておりこの曲線とアーチ環の曲線の調和も見事。壁面装飾の横スリットが総体を引き締めている。表現主義の作風さえ感じさせる本隧道は近代土木遺産Aランクに指定されている<sup>3)</sup>。

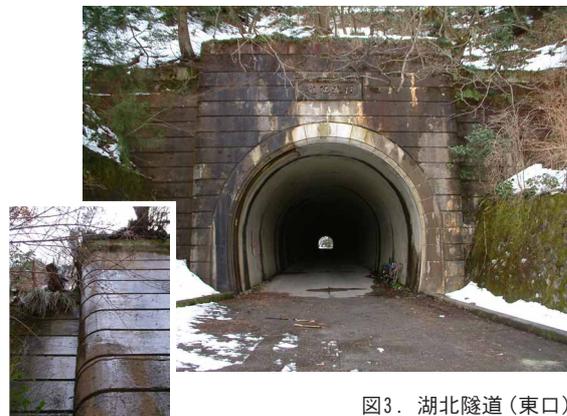


図3. 湖北隧道(東口)

### 4. 谷坂隧道(1935(昭和10)年)

東浅井郡，県道郷野湖北線。観音坂隧道と同様の下見板張り風壁面だが，凸出をなくし，かわりに半円形の付け柱を採用することで全く別の印象に仕立てられている(新古典主義風)。この付け柱は中が空洞になっており，坑門工上の滞水を吐かす排水渠も兼ねているという，機能と美観の両立が計られている。2005年(平成17)，近代土木遺産Aランクに指定された<sup>3)</sup>。



図4. 谷坂隧道(東口)

1.2.4.は「滋賀県土木百年年表」に村田が設計者であることが記されている。彼の在籍中，他に鈴鹿隧道(1923(大正12)年・三重県-滋賀県境)や百瀬川隧道(1924(大正13)年・高島市)，賤ヶ岳隧道(1928(昭和3)年・西浅井郡)，大崎隧道(1936(昭和11)年・高島市)といった意匠的に優れた隧道が作られ，村田の関与が伺えるものの，明確な証拠はない。また档鳥坂隧道(1932(昭和7)年)のように無装飾の隧道が作られた例もあり，村田がどこまで関わったのか慎重に検討する必要がある。

## Ⅲ. 設計者・村田鶴の経歴

村田鶴は1918(大正7)年に滋賀県内務部土木課勤務となり，1936(昭和11)年まで在籍しているが，筆者の調査によりそれ以前は埼玉県土木課に勤務していたことが判明した。埼玉県文書館収蔵の履歴書・職歴書から彼の足跡を辿ることができる<sup>4)</sup>。

### 1. 出生～埼玉県職員時代

1884(明治17)年7月1日，茨城県稲敷郡十余島村(現・稲敷市)生まれ。当地は霞ヶ浦と利根川に挟まれた水田地帯で，水運の要衝としても栄えた土地柄である。履歴書には「平民農二男」とだけ記されているが大変な豪農であったらしい(現地を訪ねてみると，本籍地として記された住所には今も村田姓の家があり，立派な屋敷が多い当地のなかでも際立って大きな家構えであった)。幼少時代に尋常小学校で8年，私学校で3年と，当時としては十二分ともいえる教育を受けている。経済的な支援のもと分家を前提として修学に勤しんだ姿が想像できる。その後「東京明治数学校」で学び，工業予備科中学三年程度の科目を履修。そして1903(明治36)年に工手学校に入学している。

工手学校は大学校を出たエリート(技師)と現場で働く職人(雇)の間を取り持つ工手(技手)を養成する

私学校で、工学を教える私学校としては当時最も有名なものであった。予科(2期1カ年)、本科(2期1カ年半)があり、村田は本科で土木学科を選んでいる。数学・物理といった基礎科目のほかに製図・測量に力を入れていたのが特色で、また本科(土木学科)第二期に『道路・隧道』の科目があった<sup>5)</sup>。隧道建設に関する技術知識はこの頃身につけたものと思われる。なお就学中に日露戦争が勃発し、中退して陸軍近衛歩兵第一連隊補充大隊に入隊。4年間の兵役を経て除隊し、この功績で勲八等を授与されている(除隊後復学)。

1909(明治42)年に卒業、同年暮れに埼玉県内務部土木課に雇として採用されている(明治43年に土木技手に昇任)。当時利根川や荒川は毎年のように出水し、上流に当たる埼玉県でも治水に力を注いでいた<sup>6)</sup>。村田も利根川支流の大落古利根川や荒川中条堤、小山川の改修などに従事している

大正7年4月30日まで在籍。胃潰瘍による体調不良を理由に依願退職している。

## 2. 埼玉県から滋賀県への“技手大移動”

その後滋賀県内務部土木課に採用されるわけだが、ほぼ同じ頃、村田と同じように埼玉県から滋賀県へ移った土木技手が複数いることが判明した。しかも出向辞令によるものは遠山貞吉(北足立郡技手(埼玉県から出向中)→滋賀県内務部土木課・隧道工営所主任。隧道工営所の役割については後述)だけで、残りはみな病気を理由にした依願退職を経て滋賀県で再採用される、という流れであった。ここでは彼らを“移籍組”と呼ぶことにする(表1)。このような異動形態が何を示すものなのか明らかにできなかったが、移籍組はいずれも滋賀県の地方工区長を勤めるなど中核的な役割を果たしている。村田も異動と同時に隧道工営所主任に任命されている<sup>7)</sup>。

この異動に先駆け、滋賀県一埼玉県間で上級官吏の異動があった。滋賀県内務部長であった添田敬一郎が埼玉県知事に(1913(大正2)年)、埼玉県内務部土木課長であった山田博愛が滋賀県内務部土木課長

へ転任(1915(大正4)年)している<sup>8)</sup>。つまり添田の口添えによって山田が滋賀県へ異動となり、山田によって気心のわかる旧部下たちが呼び寄せられた、という構図が見えてくる。内務省官僚の人事(地方庁の知事(勅任官)、内務部部長・課長(奏任官)といった上級官吏)が恣意的で、人脈に大きく影響されたことは内務省史<sup>9)</sup>にも見えているが、いわゆる下級官吏であった技手(判任官)も同様であった可能性が窺えて興味深い。戦前の内務省は位階に基づく身分差別が厳としてあった一方、有能な者は積極的に取り立て、適所に配置する気風があった。この異動も滋賀県に有能な技術系職員が不足していたためと見るべきだろうか。特に遠山貞吉の異動には明確な理由があったものと思われる。遠山は埼玉県時代に畑隧道(県下で最初の近代的な道路隧道。1910(明治43)年竣工)の施工に関わっており<sup>10)</sup>、その能力が買われたと推測される。

大正6年4月27日、その年の陸軍大演習が彦根地方で行なわれることが滋賀県に通達された<sup>11)</sup>。陸軍大演習は軍事教練であると同時にその地方の自治力を試す試金石でもあった。11月の開催までにあらゆる準備をしなければならなかったからだ。この年の演習では中山道の一部が大正天皇の行幸ルートとなったが、道程には家棟川という天井川があり、交通を阻害していた。ここに隧道を、しかも短期間に築造する必要が生じ、河川工事と隧道工事の経験を持つ遠山が呼ばれたと推測される。遠山の赴任は7月24日、赴任と同時に隧道工営所が設置され<sup>12)</sup>、そして家棟隧道は大正6年10月に竣工している(帯石銘)。

隧道工営所は大演習後も存続し、翌年1月に主任の常時滞在区域として犬上郡・坂田郡が指定されている<sup>13)</sup>。これらは横山隧道・佐和山隧道の作られた地域で、後の隧道建設を見越したもの(村田の来滋もその建設のため)と思われる。遠山は村田着任と同時に大津工区長に転じ、大正10年に滋賀県を辞す<sup>14)</sup>が、村田はその後も滋賀県に留まり、先述の道路隧道群を設計することになる。

山田博愛は大正7年6月に内務大臣官房都市計画課の土木主任技師に抜擢され滋賀県を去っている。村

氏名	出身	埼玉県在職期間	滋賀県在職期間	滋賀県でのおもな職歴
山田博愛	東京帝大土木工学科	M41.7.14.~ T4.3.11.	T4.3.11~ T7.6.	土木課長、陸軍大演習工営係長
佐藤道之介	工手学校	M43.4.22.~ T4.9.20.	T4.9.21~ T9?※2	大演習工営係土木技手(他県視察)、愛知川・長浜工区長
吉田勇	攻玉社	M43.8.1.~ T4.6.16.	T4.6.21~ S6?※2	大演習工営係土木技手、大津・草津・水口・長浜工区長
遠山貞吉	攻玉社※1	M30.~ T6.7.24.	T6.7.26.~ T10.※2	大演習工営係技手、隧道工営所主任、大津工区長
中澤徳次郎	攻玉社	M42.3.~ T7.1.14.	T7~ S6?※2	
村田鶴	工手学校	M42.12.4.~ T7.4.30.	T7.10.15.~ S11.1.15.	隧道工営所主任、草津工区長
杉山豊吉	早稲田工手学校	T2.12.11.~ T7.4.10.	T7~ S16?※2	長浜工区長(彦根・木之本工区長兼任)

※1 埼玉県の治水生徒制度(県費支援で技術教育を受けさせる制度)による

※2 官員録、文献(1)で確認できた範囲

田が入庁したのは7月で、山田とは入れ違いであった。村田の異動はむしろ遠山の斡旋によるものかも知れない。村田は埼玉県時代、畑隧道のあった川越工区に勤務した経験がある<sup>4)</sup>。畑隧道は工事中や竣工直後に幾度か土砂崩落を経験しており<sup>15)</sup>、その事後処理に当たった可能性が高い。その後遠山と同じ工区であった期間も2年ほどある。これらの経験が遠山と村田のつながりをもたらしたようである。

### 3. 滋賀県職員時代

滋賀県は近年まで県職員の履歴を公開しておらず、そこから村田の動向を探ることができなかった。県報をはじめとする各種資料から村田に関係するものを拾い集めたが遺漏があるかも知れない。

村田の来滋は1918(大正7)年10月5日。同日付けで内務部土木課勤務、隧道工営所主任を任じられている<sup>7)</sup>。その直後から佐和山隧道、横山隧道の設計(隧道を含む路線の設計)に関わったと思われる。

両隧道の建設が進む間、滋賀県内務部土木課にとって大きな出来事が二つあった。一つは琵琶湖北岸周遊道路の建設が15カ年計画で成立したこと、もう一つは国道2号線鈴鹿峠の改修が始まったことである(いずれも大正9年)。前者は伊香郡木之本町から海部郡塩津村までを車道で結ぶ一大計画であり、県単独の事業であった(この路線には賤ヶ岳隧道、湖北隧道、大崎隧道が建設された)。後者は三重県との共同事業で、滋賀県は同県側の道路の改修を担当した<sup>16)</sup>。

佐和山・横山の両隧道が一段落し、鈴鹿峠の改修が進められている頃、村田は草津工区の工区長に任じられている(大正13年4月15日)。その十日後には河川官吏吏員も拝命<sup>17)</sup>。しかしその年の12月18日には工区長を免じられ内務部土木課勤務(恐らく本庁詰め)となっている<sup>18)</sup>。以降、大正15年12月に三級俸給与となったのを区切りに昭和5年末まで表立った動きは見出せなくなる。

昭和6年2月14日に土木技師兼道路技師を拝命、高等官七等待遇となる<sup>19)</sup>。これは判任官の官位を昇り詰めたことを意味している。高等官への昇任は優秀な技術系判任官ではまああることだったが、当時の制度上はあくまでも“待遇”であり、いわゆるキャリア組として入庁した技師とは明確に区別されていた<sup>9)</sup>。

技師昇格後の村田はブランクを取り戻すかのように目覚ましい活躍をした。先述のコンクリート隧道群を設計したのもこの頃であり、また高時川架設の寿橋、幸橋の建設にも関与している<sup>2)</sup>。

昭和11年1月15日に依願退職。最終位階は従六位、高等官五等待遇であった<sup>20)</sup>。これは判任官出の官吏が辿ることのできる最高位であり、慣例に倣って退

職したものと思われる<sup>9)</sup>。

## 4. その後

工手学校の同窓会誌<sup>21)</sup>によれば1936(昭和11)年8月に千葉市寒川新宿に移転した旨の届けが出されている。琵琶湖北岸周遊道路の全通が同年6月であるので、完成を見届けてから転居したのかも知れない。それ以降の消息は全く掴めなかった。1955(昭和30)年に工手学校同窓会の千葉県支部が設立され、祝賀記念式典が行なわれているが、そこに出席した形跡もない<sup>22)</sup>。

千葉市街は終戦間際に空襲を受け、死者数千人という被害を出しており、その犠牲者の1人となった可能性がある。この件につき千葉市へ問い合わせたが、個人情報保護の壁に阻まれて何も判明しなかった。村田生家にも2世代前の次男坊であった彼の記録は残されていないようであった。

以上、現時点で判明している経歴と、関連する工事等を年表にまとめ、表2に掲げる。

## IV. 今後の研究課題

### 1. 村田の意匠指向の根源を探る

現時点では村田の意匠指向が何に起因するものか明らかにできていない。特に観音坂隧道、谷坂隧道に見られる下見板張り風の装飾は鈴鹿隧道に直接の影響を受けたものと思われるが、当の鈴鹿隧道の設計者が不明である現状、その如何によって推論も左右されるという状況にある。鈴鹿隧道は三重県の直轄工事であったという記録があり<sup>16)</sup>、今後三重県方面の文献調査を行なう予定である。

### 2. 滋賀県内での動向・関連する職員の動向の調査

近年滋賀県の情報公開基準が緩められ、職員の職歴が請求できるようになった。これによって滋賀県内部での動きがより詳しく判明するものと思われる。また“移籍組”の動向もあわせて調査し、埼玉→滋賀の異動の真相や、それが何を齎したのかを含め、当時の滋賀県土木課の内部事情を明らかにしたい。

## 参考文献

- (1) 滋賀県『滋賀県土木百年年表』1973(昭和48)年
- (2) 滋賀県教育委員会『滋賀県の近代化遺産-滋賀県近代化遺産総合調査報告書-』2002(平成14)年

年	月日	動向	関連する出来事・特記	出典
1886 (明治17)	7月1日	茨城県に生まれる		(4)
1903 (明治36)	2月	工手学校入学		(4)
1905 (明治38)	12月	日露戦争従軍 (勲八等受勲)		(4)
1909 (明治42)	2月	工手学校卒業		(4)
	12月	任埼玉県土木課雇		(4)
1910 (明治43)	3月31日		埼玉県畑隧道竣工, 工事監督 埼玉県 北足立郡技手・遠山貞吉	(10)(15)
	8月17日	任埼玉県土木課技手 (以降おもに河川改修工事に従事)		(4)
1915 (大正4)			埼玉県内務部土木課長山田博愛, 滋賀 県内務部土木課長へ異動(以降埼玉県 土木技手の“移籍”が続く)	滋賀県公報
1917 (大正6)	7月24日		遠山貞吉が滋賀県に異動, 隧道工場所 設置され初代主任に	(12)
	10月		滋賀県家棟隧道竣工, 直後に近江八幡 市で陸軍大演習実施される	野洲町史ほか
	12月26日		犬上郡・坂田郡が隧道工場所主任の常 時滞在区域に指定される	(13)
1918 (大正7)	4月30日	免埼玉県技手		(4)
	6月		杉本隧道竣工 (主唱鉦山が施工)	竣工記念碑
	10月5日	滋賀県採用, 任滋賀県技手, 任滋賀県 土木技手, 任隧道工場所主任	※遠山は同日付けで大津工区長に異動	(7)
1919 (大正8)	7月2日		朝鮮人街道(佐和山隧道)・黒田道(横 山隧道)改修工事の請負入札広告	滋賀県公報
	この年	佐和山隧道設計・着工 横山隧道設計・着工		(1)
1920 (大正9)	8月31日	任滋賀県道路技手, 任滋賀県土木技手 (兼任), 六級俸給与		滋賀県公報
	9月20日		琵琶湖周遊道路計画成立 国道1号線鈴鹿峠改修(鈴鹿隧道)着工	木之本町史ほか (16)
1923 (大正10)	6月30日	五級俸給与		滋賀県公報
1923 (大正12)	春	横山隧道竣工		(1)(16)
	6月30日	四級俸給与		滋賀県公報
	11月		鈴鹿隧道竣工	(1), 竣工記念碑
1924 (大正13)	3月		賤ヶ岳隧道着工	(16), 隧道銘板
	4月15日	任草津工区長		(17)
	4月25日	任河川管理吏員		(17)
	6月23日	佐和山隧道竣工		
	12月18日	免草津工区長, 内務部土木課勤務		(18)
1925 (大正14)	3月		鈴鹿峠改修竣工	(16)
	7月		百瀬川隧道竣工	高嶋郡史ほか
1926 (大正15)	12月	三級俸給与		滋賀県公報
1927 (昭和2)	8月		賤ヶ岳隧道竣工	竣工記念銘板
	12月25日	叙勲七等		滋賀県内部文書
1931 (昭和6)	2月14日	任土木技師兼道路技師, 高等官七等待遇		(19)
	2月25日	十級俸給与, 任滋賀県技師, 内務部土 木課勤務		(19)
	3月	寿橋着工	※銘板に名あり(土木課長と工区長の間)	(1)(2)
	12月	寿橋竣工		(1)(2)
	7月20日	福橋着工	※銘板に名あり(土木課長と工区長の間)	(1)(2)
1932 (昭和7)	6月	観音坂隧道設計・着工		(1)(2)
1933 (昭和8)	3月	観音坂隧道竣工		(1)(2)
	3月	湖北隧道着工		(1)(2)
	10月	谷坂隧道設計・着工		(1)(2)
	11月30日	福橋竣工		(1)(2)
1934 (昭和9)	1月	九級俸給与		(1)(2)
	3月31日	湖北隧道竣工		(1)(2)
1935 (昭和10)	12月	谷坂隧道竣工		(1)(2)
1936 (昭和11)	1月14日	叙従六位勲六等, 高等官五等待遇		(20)
	1月15日	八級俸給与, 免滋賀県技師, 免道路技 師・免土木技師		(20)
	6月		大崎隧道竣工, 琵琶湖周遊道路完成	(1)
	8月	千葉県へ転居		(22)

表2. 村田鶴略年表 (任=任命辞令, 免=免職辞令)

- (3) 土木学会『日本の近代土木遺産(改訂版)―現存する重要な土木構造物2800選―』2005(平成17)年
- (4) 埼玉県文書館蔵行政文書『元県吏員履歴』大879の2
- (5) 工手学校『工手学校一覧(明治41年版)』p. 56, 1941(明治41)年
- (6) 例えば明治40年の大水害など(総務省消防庁災害伝承情報データベース・<http://www.saigaidensho.soumu.go.jp/saigai/import.2006-12-27.190757-1/>). 村田入庁後の明治43年には当時最大の大水害が発生している(『明治四十三年埼玉県水害誌』).
- (7) 『滋賀県公報』大-第633号, 1918(大正7)年10月5日
- (8) 埼玉県『埼玉県議会史第1巻』巻末, 1989(平成元年)年
- (9) 大霞会『内務省史』1971(昭和46)年
- (10) 埼玉県飯能市『飯能市史・行政編2』pp. 72-73収録の「飯能青梅道路開削記録」より. 請負者から監督者遠山氏宛に給料が支払われている. 埼玉県文書館録の遠山の職歴によれば飯能町役場から青梅街道改修委員を嘱託され本工事に従事していた.
- (11) 滋賀県『大正六年陸軍特別大演習滋賀県記録』1919(大正8)年
- (12) 『滋賀県公報』大-第513号, 1917(大正6)年7月28日
- (13) 『滋賀県公報』大-第554号, 1917(大正6)年12月26日
- (14) フカダソフト『埼玉県の煉瓦樋門・瓦葺掛樋(その2)』  
<http://www.geocities.jp/fukadasoft/renga/kawarabuki/index2.html>
- (15) 埼玉県文書館蔵行政文書『直轄』明2954-1ほか. 明治44年, 45年と相次いで法面崩壊が起き改修がなされている.
- (16) 滋賀県『滋賀県史』第4巻最近世, 1928(昭和3)年
- (17) 『滋賀県公報』大-第1203号, 1924(大正13)年5月7日
- (18) 『滋賀県公報』大-第1268号, 1924(大正11)年12月20日
- (19) 『滋賀県公報』昭-第423号, 1931(昭和6)年2月25日 / 『官報』第1237号, 1931年2月26日
- (20) 『滋賀県公報』昭-第922号, 1936(昭和11)年1月22日 / 『官報』第2709号, 1936年1月16日
- (21) 工手学校『工手学校同窓会誌』第38巻8号(1936(昭和11)年)
- (22) 工学院大学『工学院大学校友会々誌』第4巻第4号, p. 25, 1955(昭和30)年